

ロシア語の文の分析について

服部 文昭

文とは、チェコ・アカデミーの『ロシア語文法』によれば〔2: § 891〕、言語構造の統語論レベルの基本的な自立単位であり、その構成要素は、文の構造の枠内でそれぞれの語形の統語論的役割を果たしている語形ないし語形の結合である。まずは、この定義に従って議論を進めてゆきたい。

文の構成要素となる語形は、普通、形態論的な観点から扱われている。しかし、この形態論的なクラス分けと、語形が文中で果たす統語論的な役割とは一対一の対応を持っていない。たとえば、интереснаяという語形は Книга интересная. のようにも Это интересная книга. のようにも用いられる。また、Он шёл лесом. という文の лесом と、Он шёл по лесу. という文での по лесу とは、形態論的には異なっているが、文中での統語論的な役割は同じである。

このような一対一の対応の欠如に対して、文の成分という概念が導入されている。これは、文の構成要素となる語形ないし語形の結合が表す構造的・意味的要素である〔6: 執筆はН. Д. Артюнова〕。文の成分は主成分と二次的成分とに大別される。前者では主語と述語とが区別され、後者では定語、補語、状況語が区別される。

Он	читал	интересную	книгу	в библиотеке.
主語	述語	定語	補語	状況語

形態論的なクラス分けと、語形が文中で果たす統語論的な役割とが一対一の対応を持っていない以上、文の成分の導入は当然のことである。しかし、文の成分として何をどのように立てるかについては議論の分かれるところとなる。たとえば、成分の間に序列があるだろうことは想像に難くないが、主語と述語とを取り出してその二つを並べて主たる成分として他の成分の上に置くというのは、いわゆるヨーロッパの論理学の”基層”的な影響と言えなくもない。補語と状況語に関しても、приехать в городにおけるв городのように、その厳密な区別が困難な場合がしばしば見受けられる。

はじめにチェコ・アカデミーの『ロシア語文法』による文の定義を示したが、これは、「形」、すなわち統語関係を重視した文の定義と言える。一方で、「論理」、すなわち意味の面を重視した文の定義もある。そのような見方に従えば、文とは一つのまとまった思

想・感情を表す語の集まり〔11: 8〕である。フンボルトやパウルの名前を出すまでもなく、より心理的な捉え方もある。

前述のように、形態論的なクラス分けではなく構造的・意味的である要素を文の中に見出すことは当然のことである。しかし、文をどのように捉えるかの立場の違いによって、文とその成分の関係は異なってくる。すなわち、「形」を重視した文の捉え方から出発すると、実在の種々の文を分析して成分に到る（文 ⇒ 成分）という、帰納的なアプローチになりやすい。他方、より心理的な捉え方からすれば、まず文にはどのような成分が存在すべきなのかという議論（成分 ⇒ 文）から始まるであろう。

かつてフィルモアは、文はmodalityと命題とで形成されると述べ、次のように定式化した〔19:76〕。

$$\begin{aligned} S &\rightarrow M + P \\ P &\rightarrow V + C_1 + \dots + C_n \end{aligned}$$

彼の立場も、定式の矢印の向きとは裏腹に、成分 ⇒ 文という、論理的・心理的なものである。

フィルモアの挙げたmodalityと命題という二つのもののうち、modalityについてはここでは触れないで、命題の方のみに注目したい。その命題の中で彼が基軸に据えているものは動詞である。この動詞を基軸に据えるという考え方は、テニエールの統語論から出たものである。テニエールは「単文の中心結節はけして常に動詞ではないが、しかし、もし文中に動詞が存在するなら、それは常にその文の中心となる」と述べている〔13:48 章〕。

ロシア語の文の研究においてテニエール、フィルモア的な方法を採用するのは、たとえば、Ю. Д. Апресян、А. К. Жолковский、И. А. Мельчук、Г. Г. Сильницкийや、結合価の概念でいえばС. Д. Кацнельсонなども、さらに、後で述べるА. А. Холодовичの提唱し始めた диатезаと絡んでВ. С. Храковский、В. А. Успенскийらである。機械翻訳、類型論などと比べて他の言語との対照の必要を感じない分野の研究者たちにはあまり歓迎されていないようである。

フィルモア流の格文法的な考え方がロシア語の文の研究で広く用いられない原因はいくつかある。その一つは、意味の面に大きく依拠している点で、統語論的な文の定義を抱いている多くの研究者には受け入れがたいと思われる。さらに、深層的な格の意味としてどのようなものをいくつ立てるかについても、恣意性が、すなわち、明確な基準の欠如が感じられているのではないだろうか。

モスクワ版アカデミー文法（以下『80年文法』と呼ぶ）における単文の定義の中心は

陳述の中核（文の構造図）という概念である〔1: § 1892〕。これは、多くの具体的な文から抽出された抽象的な型であり、互いに統語関係にある語形（ふつう二つ）の結合で、または一つの語形でも、造られる。前者の場合には二構成要素文となり、後者では一構成要素文となる〔1: § 1893〕。これは言うまでもなく文法、すなわち形態を重視した分類である。

二構成要素の構造図の例 : $N_1 - Vf$ 、 $N_1 - N_1$ 、 Vf_{3s} 、 Inf 、 $Her N_2$ など

一構成要素の構造図の例 : Vf_{3s} 、 Vf_{3p1} 、 N_1 、 N_2 など

統語的、意味的な観点からすれば、文の成分も当然のことながら導入せざるを得ない。『80年文法』でも文の成分という術語が用いられているが、従来のそれとは異なった用法である。まず、『80年文法』における文の成分の分類は二つの基準に基づく。第一点は、陳述の中核（文の構造図）の構成要素か否かである。第二点は、文の意味構造の形成において文のすべての成分を、文の形式的な構成に参加しているか、およびその意味、という必須の二観点から識別できるかということである〔1: § 1904〕。この基準に基づいて主成分と拡大成分とが定められる。

文の最小限の姿は文の構造図がそのまま実現されたもので、いわゆる非拡大文である。この文は主成分だけで成り立っている〔1: § 1902〕。ここに主成分という術語が用いられている。したがって、二構成要素の構造図には二つの主成分が、一構成要素の構造図には一つの主成分が含まれることになる。しかし、従来と違う点は、これらの主成分のうちで限られたもののみが主語、ないし、述語の名称を与えられている点である。

二構成要素の構造図に含まれる主成分のうち、以下の11の構造図の中で前者が主語と、

$N_1 - Vf$ 、 $N_1 - N_1$ 、 $N_1 - Adj_{1kp}$ 、 $N_1 - Adj_{1\pi o1}$ 、 $N_1 - Part_{1kp}$ 、
 $N_1 - N_2 \dots or Adv$ 、 $N_1 - Inf$ 、 $N_1 - Adv_{-o}$ 、 $Inf - N_1$ 、 $Inf - Adv_{-o}$ 、
 $Inf \quad cop \quad Inf$

後者が述語と呼ばれるのである〔1: § 1911〕。それ以外の場合には、二構成要素の構造図でも一構成要素の構造図でも、主成分に特別な名前はない。

『80年文法』では二次的成分という術語は用いずに、拡大成分と呼んでいる。この成分は、様々な重要さの度合いを持った情報要素を非拡大文にもたらす。拡大成分の文法的性質は一樣ではなく、様々な文の成分とそこだけに掛かるように結びついたり、文を全体

として拡大したり (детерминант 文副詞)、二つの主成分を同時に拡大したりする [1: § 1902]。文の成分に関して『80年文法』でこのように従来とは異なった扱いがなされているのはなぜだろうか。理由はいくつか考えられるが、一つには、意味と文法的な文の分類の仲立ちを文の成分にさせようとしたためではないかと思われる。文の意味構造とは、『80年文法』によれば、文の成分の文法的小よび語彙的意味の相互作用によって形成される意味的構成要素の関係である抽象的な言語的意味である。『80年文法』は文の意味構造のカテゴリー (文の意味的構成要素) に基本的なものとそうでないものを区別する。前者に入るのは、陳述の標識、主体、客体である。後者は、様々な修飾の意味を持ったあらゆる意味的構成要素である [1: § § 1961-1962]。

文の成分と意味的構成要素の関係はというと、陳述の標識は主成分に必ず含まれる。二構成要素文では二つの主成分のうちのどちらか一方に、一構成要素文では唯一の主成分がそれを含む。すなわち、陳述の標識はすべての文に必ず含まれるのである [1: § 1966]。他方、主体や客体は、いろいろな手段で表される。

	Лес	шумит.
構造図	N ₁	Vf
成分	主成分 (主語)	主成分 (述語)
意味的構成要素	主体	陳述の標識
	Денег	нет.
構造図	N ₂	Нет
成分	主成分	主成分
意味的構成要素	主体	陳述の標識
	Ночь.	
構造図	N ₁	
成分	主成分	
意味的構成要素	陳述の標識・主体	
	Ребёнку	весело.
構造図	—	Praed
成分	拡大成分 (文副詞)	主成分
意味的構成要素	主体	陳述の標識

主体や客体はこのように主成分に含まれてこない場合もあるし、陳述の標識と一緒に表されることもある。また、主成分は、二つの基本的意味的構成要素を含む場合も多いことも分かる〔1: § 1978〕。

『80年文法』の文の分類法での問題点はどこにあるのだろうか。意味の面を考慮することはもちろん大切なのであるが、その前にまず、すべての基本となるべき文の構造図に欠陥があると思われる。構成要素が一つなのか二つなのか明確で無い場合がままある。何を基準にして構成要素を選定しているのだろうか。たとえば、

Были светлые майские сумерки, я ехал верхом по нашему заказу.

За окнами было хорошее лето.

といった文はN₁型の一構成要素文に分類されている〔1: § 2536〕。しかし、素直には承服できない。また、構成要素が二つの場合には、その両者の間の関係の基準も客観的でないように思える。さらに、それぞれの構造図に図の意味が付してあるのだが、これもとても有用には思えない。要するに、分類の初めに曖昧な部分があって、それをずっと引きずっているのである。

	Ребѣнку	весело.
構造図	——	Praed
成分	拡大成分 (文副詞)	主成分
意味的構成要素	主体	陳述の標識

のような例で、構造図には含まれないとされる拡大成分なしで果たして取り上げる意味があるのだろうか。『80年文法』自身が、最も重要な、時には主成分に含まれるものよりも本質的な情報を文にもたらしこともありうる〔1: § 1902〕、とする一部の拡大成分の扱い方に問題はないのか。そもそも、主体や客体は基本的な意味的構成要素であるのに、それを含んだ文がある場合には構造図には十分に反映されていない。次のような文で、

Ему нравится картина. : Нравится картина.

右の構造図そのままの文を取り上げるだけでは、文法的にも不十分のはずである。

文を分類するためにその分析にあたり意味的な要素を考慮することは理に適っている。しかし、それをどの段階で行うかが大切なのである。文の文法的な、すなわち、形態的な分割と意味的構成要素への分割とは一致することもあるし、また、しないこともある〔1: § 1963〕。

	Человека	охватила	радость.
構造図	—	Vf	N ₁
成分	拡大成分	主成分 (述語)	主成分 (主語)
意味	{ 主体	陳述の標識	起因
			状態

たとえば上の例は、文法的には、二つの主成分と一つの拡大成分との三部分に分かれるが、意味的には、二つの構成要素に分けられる。『80年文法』は、形と意味とをはっきりと区別しようとして意味的な要素を考慮する段階を間違えたと思われる。先にも触れたが、この場合にもはっきりと分かるように、基本的な意味的構成要素とされるものが抜けるようでは、構造図と意味の部分のずれが大き過ぎはしまいか。

『80年文法』とは対照的に、その辺をうまく処理しているのはチェコ・アカデミーの『ロシア語文法』である。

チェコ・アカデミーの『ロシア語文法』は、言語のコミュニケーションの単位としての文は、陳述力に支えられており、陳述力は、動詞、具体的にはまず法、次いで時制の形態論的カテゴリーによって実現される、とする〔2: § 893〕。陳述力を文の存在にとって不可欠のものとする考え方は、『80年文法』も同じである。しかし、それを動詞に求めた点がチェコ・アカデミーの『ロシア語文法』の優れた点である。

ここでは次に文の統語中核（基本的統語構造）について述べられるのであるが、その基礎になっているのが、動詞の結合価である〔2: § 895〕。その結果、上で引いた、

За окнами было хорошее лето.

Ему нравится картина.

のような文も無理なく扱われている。

『80年文法』では詳しく述べられていた意味的な面は、ここでは扱われていない〔2: § 923〕。文の成分による分析も行われぬ。ただし、 прямой объект、 объектная

связь、объектный детерминант などといった用語は使われている。

チェコ・アカデミーの『ロシア語文法』における文の統語中核（基本的統語構造）の記述が現在のロシア語研究の一つの到達点であることは論を待たない。だが、今後の展開を考えた場合、意味の面の取り扱いも考慮して、もう少し別のアプローチも可能ではないかとも思われる。

まず、主語の扱いから見てみよう。チェコ・アカデミーの『ロシア語文法』は、主格主語と述語との組み合わせを含む文を二肢文（двусоставное предложение）、述語のみで主格主語を含まない文を一肢文（односоставное предложение）と呼び、すべての文がこのどちらかに分類できると言う〔2: § 917〕。さらに、主格主語と述語との間の関係はあらゆる種類の従属関係と本質的に異なっていると述べる〔2: § 916〕。これは、結合価文法の祖であるテニエールの、主語と述語とを対置する考え方は、言語学とは関わりを持たない、先験的な形式論理学のものと言う厳しい批評（〔13:49 章〕）を宛てるのは行き過ぎかもしれないが、いわゆるヨーロッパの論理学の”基層”的な影響というものには根深いものがあると感じられる。

次に、文の統語中核（基本的統語構造）は、動詞の結合価に基づくとはいえ、それから文の構造的、意味的な面を知ることはできない。やはり、文の成分のように文中での構造的・意味的要素の導入は避けられない。

フィルモア流の格文法の考え方が全く無視されているのではないことは、チェコ・アカデミーの『ロシア語文法』を見ても分かる（たとえば、залог を論じた § 350）。『80年文法』のように拙速なやり方は避けねばならないが、залог に関わる場面だけでなく、すべての文で考えてゆけないだろうか。

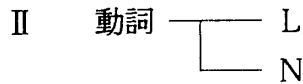
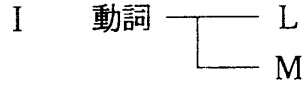
初めにも指摘したとおり、補語と状況語に関して区別がつきにくい場合がままある。二次的成分に補語、定語、状況語の三つを立てたのはブウスラーエフであるが、統語関係という形式的な基準と、論理的・意味的な基準という二つの異なった基準も持ち込まれたので（〔11:29〕、〔5:311〕）、その混乱が現代まで続いている〔2: § 1904〕。『80年文法』が二次的成分という術語を用いなかった理由の一つもそこにある。

「文 ⇔ 成分」、「成分 ⇔ 文」どちらの方法を採るにせよ、文に欠かせないものとして必ず名の挙がってくるものがある。それは、動詞述語、主語、補語の類、状況語の類である。文の成分として何を立てるかは、経験的にここから出発しても良いのではないか。各成分をどう関係付けるかが問題となる。

ここで大切なことは、統語的な最小の基本モデルを考えるのであるから、フィルモアのように、深層的な格の意味のレベルまでは進んで行かないことである。そのレベルまで行くと、ウスペンスキーのアプレシアンに対する批判を引くまでもなく〔14:72〕、意味要

素の設定にも恣意的と感じられる部分も多くなってしまう。

結合価的なアプローチをする以上は、やはり、動詞を中心に据えるべきである。そうすると、次の二つの定式が考えられる。

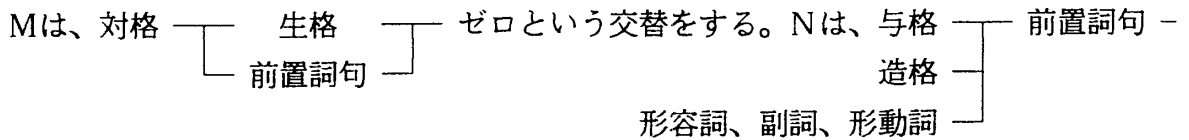


ここで、Lは両者に共通であるが、MとNとは異なっている。L、M、Nの内容に進む前に一つ断っておかねばならないことは、形態論的なレベルの話ではないので、L、M、Nそれぞれに様々な語形ないしそれらの結合で実現されるのである。

Lは主語と考えて差し支えない。ただし、与格形のいわゆる意味上の主語や、造格によるいわゆる動作主などもこれには含めない。ようするに、主格、生格、およびゼロ形式のみを考える。

Mは、変化、言い換えれば「動」とする。Nは、状態、「静」とする。これは、ごくごく簡単に言ってしまうと「localistic」viewで、しばらく前までは今日では信用されていない（〔19:61〕）という扱いだったが、アンダーソンなどに見直す向きもある（〔18〕、〔21〕）。しかし、ここで頼りにしてよいのは、やはりヤーコブソンだろう（〔20:112〕）。

ヤーコブソン				'localistic' view	
全体格	:	主格	対格	生格	動
周辺格	:	造格	与格	前置格	静



— ゼロという交替をする。音素の環境による交替を連想すると分かりやすい。（/o/ : [o], [a], [ɔ]）。

MとNとが、区別が付きにくい場合には、その動詞が対格を取れるかどうかで決定でき

る。たとえば、идти по улице と перейти через улицу の場合、後者には перейти улицу という用法もあるのでM、一方で前者はNとなる。говорить с человеком と говорить с волнением とはどちらもNである。

次のような文でも、

Художник написал картину.

L 動詞 M

Картина была написана художником.

L 動詞 N 任意要素

この二つの文が異なったカテゴリーに属することが良く分かる〔7:49-50〕。後者の例からは、動作でも動作主でもなく、出来事を出来事自体として伝えるという受動態の機能をもよく読み取れる。

このような文の分析の方法は、たとえば、A. A. Холодович の提唱し始めた диатеза と結び付けて考察を進める際にも、ウспенスキーは文のどの意味レベルで диатеза を立てても同じだとするが〔14:70〕、従来の文の成分に基づいて行うよりも実り多いはずであるが、それについては稿を改めて論じたい。

参 考 文 献

- 1 Русская грамматика. М., 1980.
- 2 Русская грамматика. Прага, 1979.
- 3 Апресян Ю. Д. Лексическая семантика. М., 1974.
- 4 Богданов В. В. Семантико-синтаксическая организация предложения. Л., 1979.
- 5 Валгина Н. С., Розетналь Д. Э., Фомина М. И. Современный русский язык. М., 1987.
- 6 Лингвистический энциклопедический словарь. М., 1990.
- 7 Ломтев Т. П. Предложение и его грамматические категории. М., 1972
- 8 Медведева Л. М. Части речи и залог. Киев, 1983.
- 9 Пешковский А. М. Русский синтаксис в научном освещении. М., 1956.
- 10 Потебня А. А. Из записок по русской грамматике. М., 1958. Т. I-II.
- 11 Сизова И. А. Что такое синтаксис. М., 1966.
- 12 Сильницкий Г. Г. Глагольная валентность и залог // Типология пассивных конструкций. Л., 1974.

- 13 Теньер Л. Основы структурного синтаксиса. М., 1988.
- 14 Успенский В. А. К понятию диатезы // Проблемы лингвистической типологии и структуры языка. Л., 1977.
- 15 Холодович А. А. Проблемы грамматической теории. Л., 1979.
- 16 Храковский В. С. Пассивные конструкции // Теория функциональной грамматики. Персональность. Залоговость. СПб., 1991.
- 17 Шахматов А. А. Синтаксис русского языка. Л., 1941.
- 18 池上 嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学』 大修館
- 19 チャールズ J. フィルモア 1975 『格文法の原理』 三省堂
- 20 R. ヤーコブソン 1986 「一般格理論への貢献」『ロマーン・ヤーコブソン 選集1 言語の分析』 大修館
- 21 Anderson, J. M. 1971 The Grammar of Case. Cambridge.